

めぐりめぐりて

三国恋戦記 孔明×花

サイト掲載「水に浮く」のロングバージョンです。
ゲーム前半を孔明視点で振り返りつつ、
いつも通りいちゃいちゃしてます

花は不思議な人だった。

いきなり泰山の山の中に現れた彼女。

奇妙な恰好で——年頃の女性がありえないほど脚を出して、ぼつんと山の中に一人でいた。その奇妙な衣は仕立ても良く、またその細く白い手足から賊とも農民とも思えなかった。恰好こそ奇妙だが、どこかのそれなりの身分の妻女ではないかと思われた。それなのに山の中に一人。それだけでも奇妙だった。

人攫いにでもあったのかと思いきや、彼女はとてもものんびりとしていた。賊がそばにいるというのに、一人で逃げることはせず、亮の怪我の心配をし背負って助けてくれた。あの当時のボクはいくら子どもとは言え、赤ん坊を抱えるようなわけにはいかなかっただろうに。

彼女の背を覚えている。あの時は親切な人だと、悪いように言えばお人好しの人だと思った。

不思議なことを言う人だった。ばいきん。海に囲まれた国。聞いたことのない名前の人物。知識では既にそこらの大人を凌駕していた亮が、聞いたことのないこと。

でも、決して悪いような人には見えなかった。

それなのに、奉高を落とした反乱軍を率いていたのが彼女だと聞いた。まさかと思った。あののんびりとした彼女が？「お前は、父上の、ボクの敵なのか？」という問いに、彼女は「分からない」と答えた。目を伏せてつらそうに「敵とか、味方とかもよく分からない」と呟いた。

そして亮をまっすぐに見た。

「ただ、亮くんのお父さんが殺されてしまうような世の中は、嫌い。許せないと私も思うから——」

分からないことを言う人だと思った。敵か味方か、そんなことも分からないだなんて。けれど彼女の、花の瞳は真剣で、哀しみの色を浮かべていて、彼女が父の死を悼んでくれていること、本気でこんな世の中が許せないのだと言っていることが分かった。

彼女のその瞳が忘れられなかった。

反乱軍は単に賊だと思っていた。荒くれどもが集まる暴徒の集団だと思っていた。そういう側面もないではなかったけれど、それだけではなかった。

反乱軍には、女の人も子どももいた。乳飲み子を抱えた女の人さえいた。暴徒というより、どちらかと言えば流民の集まりだ。決して裕福そうではなく、その日の食糧にすら困る日もあったのだ。そんなこと、ボクは全然知らなかった。その貴重な食糧を狼に襲わせたボクを憎むのも、当たり前だ。

ボクは何も知らなかったのだ。孫子や呉子、春秋を読み語んじることはできても、何も見えていなかった。何も分かっていたいなかった。天候不順で田畑が荒れることも、街の店が潰れていくことも、農民が田畑を捨てて逃げていくことも、こうして反乱が起きるその意味も、何も分かっていたいなかった。他に方法がなくて、宗教に縋ることしか出来ない人たち、ただ奪っていくだけの政府とは違って、力強い言葉で生活の保障をしてくれた人を信じざるを得ない人たちが、そこにはい

た。

そして花は、狼を引き入れたボクをかばってくれた。亮が復讐をしようとして、反乱軍に潜り込み捕まってしまった時、花が弟子だとかばってくれたのだ。

ボクは誰を憎めばいいのか。

花はまたボクを助けてくれた。太平道は、思っていたような賊の集団ではなかった。

ボクは何も知らない。何も出来ない。

途方にくれたボくに、花は言葉をくれた。

「今まで何をしてきたか、何ができて何ができなかったか、これから何ができるか考えて」

ボクは本をたくさん読んだ。知識はある。けれど現実を、今、ここに生きている人たちは見ていなかった。これから何ができるのか……。

ボクはあの時、もつと色々なものをちゃんと見て、考えて、自分のやりたいことを見つけたと思ったのだ。

ボクはずっと考えていくことになる。君がいない間も。君と再会してからも。そしてきつと、君を失った後も。

花は不思議な人だった。

花はその権利があるはずだったのに、幹部連中と同じ豪華な食事を断っていた。晏司や季翔、他の流民と同じく、お粥をすすっていた。芋だけの時も文句は決して言わなかった。なぜと問うと、逆に不思議そうな顔をされた。

「みんながお粥なのに、一人だけ豪華なご飯なんて食べても

おいしくないよ」

当たり前のことだと言うのだ。そしてその顔を曇らせた。「本当は、みんなのご飯をちゃんと用意したいんだけど」

同感だ。

でも、その大半が畑を捨てて集まってきた農民なのだ、食糧の持ち込みなどできるはずがない。占領した地の人々から徴収すればよいのだが、それでは黄巾党が反感を集めるだけだ。漢への反乱、現在の腐った漢王朝を倒すことを目的とした集団なのだ。民の反感を買うわけにはいかない。それなのに評判は高まり、人だけは集まってくる。

既に先行きが見えた反乱だった。

今はまだ相手が虚を突かれ、そして腐りきった鈍い体制のおかげで政府側の動きが緩いだけだ。各地で立ち上がりつつある反乱制圧のための義勇軍が集まれば、こんな寄せ集め集団は一気に瓦解してしまうことだろう。

花も黄巾党が本当に漢王朝を打倒し、新しい世を作ることができるとは、思っていないようだった。

花は、未来を見据えていた。

戦を無くすために。ボクのように、父親が無意味に殺されてしまうような世を作らないために。

明日を生きたことしか考えられない、ボクたちとは違う。

仙女だからボクたちと見えているものが違うのか。

花は当たり前のように、未来を見ていた。未来を信じていた。

「頼りにしていたり、尊敬している人は？」という亮の問いに、花は「師匠かな」と答えてくれた。

花の師匠。花の話を聞いていると、かなり変わった人物だ。けれど花は、その「師匠」をずいぶん信頼し、彼女自身気づいていないようだけれど——本心に心配になってしまいうほど鈍いのだ——その師匠のことが好きみたいだった。

でも、花は約束してくれた。亮の誘導に、うなずいてくれた。

「漢王朝を倒して終わり？」

「反乱が成功したって、今あるものが壊されただけ。全部放り出して行っちゃおうの？」

責めるように言えば、元いた所へ戻ると言っていた彼女は顔を曇らせ、それでも「ここに残って、戦をなくすために出来ることがあるかも」と、言ってくれたのだ。お世話になつた玄徳軍の人たちを助けたいのだけど、ここに残っても出来るかも、と。

ずるいと分かつていた。卑怯な手だ。花が恋心を自覚してないのをいいことに、絡め取ってしまおうと思つた。その代り、ボクももつと色々なことを学ぶから。

「知恵も知識も力になるんだよ」

花の言葉の通りに、ボクは力を蓄えてあなたの力になる。あなたの師匠のように、あなたを支えられる存在になる。早く大人になるから。

「ボクは、みんなが父上のように殺されることのない平和に暮らせるような、世の中の仕組みを作るための知識と力が欲しい」

それは、花と黄巾党で過ごして見つけ出したボクのやるべきこと、花の戦をなくしたいという願いのために、ボクの出来ること。

あなたがここにいてくれるのだから、ボクはボクの全力を尽くすと誓う。

だから、ボクのそばにいて。ボクを好きになって。

あなたと一緒に、色々なものを見て、教えてもらつて、あなたと共にありたい。

それなのに、花は、ボクの前から消えた。

光の中へ、消えてしまった。

*

「亮様、文が届いていましたよ」

「文？」

使用人の言葉に、亮は首を傾げた。まさか、花？

「机の上に置いておきました」との言葉に気もそぞろになる。期待を胸にいそいそと自分の部屋に戻り、机の上に置かれた竹筒を開き、肩を落とした。

晏司からの文だった。

相変わらずの汚い字。でも孟徳軍でも元気に上手くやっているようだ。それはそうだろう。彼らは強い。実力主義の曹孟徳であれば、青洲の兵たちを無下にはしないだろう。